

スロー・ディザスター

緩慢な災禍

——放置によってわれわれの映画遺産はいかに破壊され続けるのか(後)

デイヴィッド・ウォルシュ

David Walsh

前号に引き続き、デイヴィッド・ウォルシュ (FIAF 技術委員会前会長・英国帝国戦争博物館デジタル保存コンサルタント)の講演内容を掲載する。

本論と写真掲載を快く許可していただいた著者、FIAF、同機関誌JFP、撮影者シヴendra・ダンガルプル氏に感謝します。We would like to thank the author David Walsh, FIAF, the Journal of Film Preservation, and the photographer Shivendra Singh Dungarpur for their kind permissions to reprint the article and use the accompanying photographs.

[本稿は2018年に開催された第74回国際フィルムアーカイブ連盟 (FIAF) プラハ会議における講演の再録改稿版である。]

無論、あらゆる特徴を保持し続けるために本来すべきは、ただひたすらオリジナルを保存することであり、複製することではありません。オリジナル原版のように歴史的なアーティファクトを保存目的で複製することに違和感がないとすれば、それはデュープの作成が昔からフィルム技術の中核を占めてきたからにすぎないのです。救済できない段階までオリジナルが劣化すれば、悲しいことに、複製が唯一の選択肢になってしまいます。同じくらい悲しいことは、現在われわれフィルムアーキビストが着手できるオリジナルの複製方式のすべてに何らかの欠陥があるということでしょう。写真化学的な複製では、オリジナルを保存するという目的に叶うレベルの再作成は、明らかに無理なのです。アナログ複製に特有の欠点は別として、デュープポジはどう頑張ってもオリジナル原版のレプリカにはなりません——一つには、デュープポジはネガではなく、あくまでポジなのです。ましてや、モノとしてのフィルムですらないデジタル複製が、オリジナルに近づけるわけがありません。保存を目的とした複製のあるべき姿を、単なる複製としてではなく、オリジナルの「記述」(理想的にはフィルムのエッジマークからスプライス、パーフォレーション、画の粒子構造まで含めた網羅的なもの)として考えれば、たとえオリジナル

そのものを保存していなくても、オリジナルの情報は保存していることになり、未来の技術を使ってオリジナルを細部まで完璧に再作成する可能性にも期待をつなぐことができます。

言うまでもなく未来の技術はまだわれわれの手の届かないところにありますが、いずれ何らかの新技術が現れて、純粋な情報から完璧なレプリカを構築するでしょう。実は現行の技術もフィルムの情報としての記述を作成していますが——それがまさにフィルムスキャナーの仕事です——精度は高くありません。現在のスキャナーはフィルムに近い解像度とダイナミックレンジを採用しており、成果物にスキャナー自体の特性を負わせてしまいます。技術の介在をまったく感じさせないレベルでフィルムをキャプチャーできる日が来るまで、オリジナルを十全に記述したとは主張できないでしょう。

そのように主張できる日がやってこない限り、劣化し続けるフィルムの救済に向けて試すことのできる手法は、どれも深刻な問題を含んでいます。作品の初公開時の上映用プリントのレプリカ作成を念頭に何かを保存するなら、そのような問題も許容されるでしょう。この場合、アナログ的な道順——つまり、オリジナル原版からデュープポジへ、あるいはデュープポジからデュープネガへ——と歩を進めるのは全く合理的な手法です(ただし直接オリジナルから作成したプリントのレプリカは除く)。とはいえ、その道順がオリジナルのルートから逸れる場合、例えば始点が上映用プリントの場合、そもそも生フィルムはそのようなルートを想定して設計されていないため、悪い結果につながる可能性が高くなります。なぜなら、上映用プリントは生産ラインの始点ではなく、終点として設計されているからです。それだけが理由ではないにせよ、上映用プリントから始める場合は、デジタル・インターメディアイトの使用が主流となりました。アナログからデジタルに向かっても、デジ

タルからアナログに向かっても、何れも欠点はありますが、成果物はスクリーンに上映して何ら遜色がないレベルといえるでしょう。場合によっては、たとえ2Kスキャンでも、ごく一般的な35mm上映用プリントを丁寧に再作成するに足る情報を問題なくキャプチャーできるかもしれません。なぜなら大抵の配給プリントはオリジナル原版より解像度が低いので、記録を残しやすいのです¹。

けれどもこれは保存ではありませんし、どう考えてもそのようなアプローチには熱意が欠けています。上映用プリントを再作成するのに十分な情報だけを救うことを目指していると、原版の持っているそれ以上の画の詳細は、プリント作成とともに切り捨てられ、使用された生フィルム、そこにあったスプライスや損傷などの記録もやはり処分され、失われてしまいます。そうすると、将来のフィルム管理者がFIAF倫理規定を無視して「やりすぎの復元」を楽しむ権利が奪われるかもしれません。われわれに未来の利用者の選択の幅を狭めるような権利があるでしょうか。現実を撮ったフッテージのことを考えれば、そのような権利がないことは明白です。プリントに残っていないカメラネガには残っている情報を未来の研究者が立証可能なかたちで分析できるように残し続けること——それはまさにフィルムアーキビストの責務です。

いま救済できないものまで救済できるようなスキャナーが将来登場するまでは、われわれは4Kや6K(潤沢な予算があれば8K)のスキャナーで、ゲートをうまく通過できない繊細なフィルムマスターの面倒をみながら、サウンドトラックのことも気かけつつ、ABロール、画の合成、オプチカル処理といった映画製作に特有の数えきれないあれこれと格闘することになります。現在のところ、そこまでたいへんな作業を伴うのはかなり特別な復元プロジェクトに限定されており、一般的な復元はまったく別の目的をもってします。すなわち、スクリーンでのオリジナルの鑑賞体験に可能な限り近づけるというものです。

今日の世界において、保存のためのデジタル化は高額で、時間がかかり、しかも役に立ちません。それでもデジタル化しか選択肢がない場

合もあります。そして実際のところ保存用のフィルム複製が、役立たずのデジタル複製にすら劣ることも珍しくはありません。最良の保存手段はこれからもずっとフィルムだと主張して譲らないフィルムアーキビストも少なからずいますが、よく考えるとそのような主張には奇妙な自己矛盾が見られます。例えばデジタル・インターメディアイトを介して作成されたフィルムマスターの場合、オリジナルの情報を遥かに多く持っているのはデジタルファイルの方なので、フィルム作成の元になったデジタルファイルのアナログ複製を、そのデジタルファイルのために保存することには何の意味もありません(デジタルファイルの消失、破損、陳腐化を恐れているなら、早急にデジタル保存の方針を見直すべきでしょう)。必ず、フィルムアーキビストはオリジナルプリントのルックも保存したいと考えますが、技術的な限界から、これらは別々に行うしかありません。ネガとプリントの特徴と使用目的がまったく異なるように、保存用のデジタルマスターと視聴用に選ばれたどのメディアも、まったく異なる存在なのです。

ところで、JFIに散見されるような保存倫理の原則に関する深い議論は、世界の多くの場所ではほとんど注目を集めていません。現実には厳しく、多くのフィルムアーカイブのほとんどの所蔵フィルムは分解が進んで、いかなる救援も手遅れになってしまいました。フィルム素材に数年たらずで死をもたらすような気候で、文化予算も皆無かもしれない——そうした不幸な場所では、献身的な少数の者が、彼らの映画遺産が目の前で朽ちるのをただ呆然と見つめているしかないのです。そのような状況の中で、映画に関心を向けた政府から——大抵、政治的に支出可能な期間内にコレクションすべてのデジタル化をせよという要求として——突如贈り物が届いたら、まるで奇跡のように感じるかもしれません。しかし、その贈り物は多くの問題をもたらします。予算を与える側がフィルム収蔵庫の建設に興味を持つことはめったにありませんし、すべてのフィルムを氷点下で収蔵するとなれば維持費も高額になります。そこで、全部デジタル化して問題を一気に解決しようとするのです。

理解してもらうのは難しいですが、デジタル化には長い時間とかなりの手間がかかり、そして遠からぬ将来、その成果にも落胆させられることでしょう。デジタル化と並行して、そのコレクションの分解は進むのですから、フィルムの期待寿命より長くかかるようなデジタル化計画はそもそも破綻しています。そのような状況においては、何らかの転換が必要です——理想を言えば、早急に低温の保管庫を建設して少しばかり時間を稼ぐとよいでしょう。熱帯地域のフィルムアーカイブのために建設された低温の収蔵庫は、環境的要因から、ISO基準より高めの温度設定で稼働することが多く、外気より20℃も低い収蔵庫に入ると、フィルムが長期保存の環境に置かれているかのように錯覚しますが、庫内の温度が10℃以上ならば、実はせいぜい中期保存なのです。ましてや既にひどく劣化している多くのフィルムにとっては、おそらく短期的な解決でしかないでしょう——化学分解は、低温・低湿環境の維持がどれだけ難しきろうが、お構いなく進行します。しかしながら、低温のフィルム収蔵庫の建築術は近年かなり発達し、以前ならいくらなんでも高望みだと思われたことも、挑戦しやすくなりました。いまや保管環境の改

善に向けた努力は、性急なデジタル化によるコレクション救済の試みよりも遥かに安価で、かつ実用的です。

このような厳しい状況にあるフィルムアーカイブだけがうまくいっていないわけではありません。同じように不適切な保管庫の条件を見ても見ぬふりをしている状況は、大部分ではありませんが、世界の多くのフィルムアーカイブの悩みの種です。このような不本意な状況は、フィルムアーカイブ活動の隠された秘密といえるでしょう。入手可能な予測ツールでコレクションの寿命を頑健に分析すれば、保管環境ごとに適した戦略を考えることができます。腐蝕のかなり進行したフィルムの寿命はよくわからないままですが、その寿命が短いということだけは確かです。そうしたツールとコレクションの状態に関する簡単な統計調査を併用すれば、事実上、コレクションのどの部分が短期保存の状態に置かれていて、それゆえに救済に向けた戦略を必要としていることが明らかになるでしょう。劣化した(IPIの酸性度の基準で1.5を超える状態の)フィルムをまったく所蔵せず、ISO基準に忠実な環境でフィルムを保護している空想上のフィルムアーカイブなら、短く見積もっても今後100

年は安泰です。それよりやや厳しい中期保存の
カテゴリーでは、想定されるフィルムの寿命は
半減するかもしれません。現時点ではそれでも
十分に許容されるでしょう(ただし50年後の後継
者には許容し難いかもしれません)。現実の(例
えば、間違いなく劣化素材を所蔵しているよう
な)フィルムアーカイブでは、劣化の度合いによ
ってフィルムの一部が短期保存の環境にあると
いう現実を受け入れねばなりません。既に劣化
しているにせよ、置かれている環境が悪いにせ
よ、いかに対処するのか戦略を立てないと、そ
のフィルムアーカイブはフィルムを失ってしまう
か、そうでなくてもフィルムがいよいよ危機に
陥ったとき、救済と復元に相当の予算を投入す
ることになるでしょう。

フィルムの確実な長期残存のための多様な選
択肢を費用対効果によって評価選別するのは、

誰にもできる概算なだけに、あらゆるフィルム
アーカイブがその作業をとくに終えているは
ずです。あとは、ことあるごとにその結果を政
治家や助成団体の鼻先にちらつかせることが重
要です。実に多くのフィルムアーカイブが腐食
したフィルムに囲まれた状態に慣れてしまっ
ていますが、収蔵庫に漂うあの酢酸臭はアセテ
トフィルムの死臭なのです。しかもフィルムの
コンテンツ救済は年を追うごとに困難になっ
ていきます。ロールに巻かれたフィルムが密着
して固まり始めたら、もはや手遅れかもしれま
せん。新しい保管庫建設プランでさえ、コレク
ション内の大方のフィルムに不適當なことがよく
あります。避けられない分解が始まった時、コ
ンテンツを救済するための莫大な追加費用はど
うするのでしょうか？

テレビに関連した分野に目を向けると、早急

な取り組みが必要とされるビデオテープ保存に
関心を高めてもらうためのキャンペーンが、ある
程度の成功をおさめました。ビデオテープとい
うメディアの保存方法がひとつしかないため、単
純でわかりやすいメッセージを提示できたのも
成功の秘訣でした²。片やフィルムは複数用意さ
れている選択肢を前に苦しんでいます。しかも
フィルムは世間一般の期待に反して、実のところ
驚くほど長寿なのです。ナイトレートフィルム
は寿命が短いと誤解されることも度々でしたが、
ナイトレートをそのように誤解した悲観論者は、
アセテートについてもやはり誤解しているのだ
でしょうか。そうかもしれません。しかし、世界
中のフィルム保存庫の全体像が間違っているとは
思われません。仮に期待寿命がそこまで悲観的
ではないと証明されたとして、われわれは危険を
冒したりするでしょうか。フィルムアーキビスト
はビデオアーカイブ活動のコミュニティの事例³
に学び、フィルムを放置することによって生じる
損害額がどれくらいになるかを算出すべきです。

ビデオテープ同様、フィルムもまた時間との
闘いです。何もしていないのはもってのほか
ですが、大量のフィルムのデジタル化を急ぐの
はとるべき正しいステップではありません。多
くのフィルムアーカイブにとって、フィルムのデ
ジタル化が安価で手軽になり、そしてもっと改
善されるまで、保管環境の改善に向けた戦略を
立てて時間を稼ぎ、デジタル化の対象をとくに
状態の悪いフィルムに限定するのが賢明な解決
のようです。低温の収蔵庫を建設しましょう。冷
凍庫を購入しましょう。それは難しいことですし、
政治家が飛びつくような魅力的な話題でもあり
ません。それでもわれわれは、やらねばならな
いのです。

□

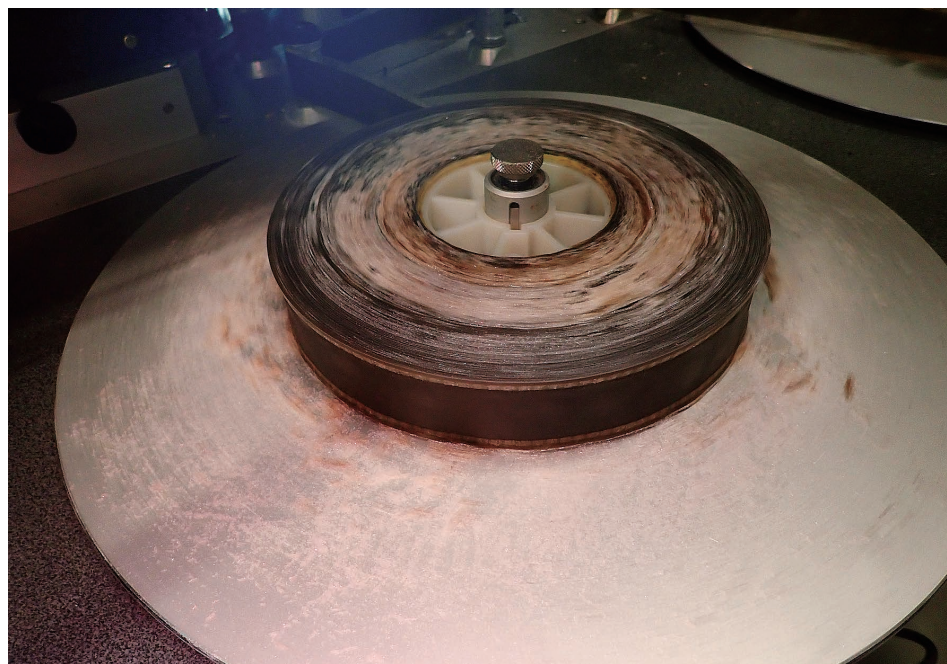
(英国帝国戦争博物館(IWM) デジタル保存コンサル
タント、FIAFトレーニング&アウトリーチ・コーディネー
ター／翻訳: 石原香絵／構成: 国立映画アーカイブ)

註

1 35mm Cinema Film Resolution Test Report ITU-R Doc. 6-9/3. 国際
電気通信連合ITU, 2001.

2 継続開催されているNo Time to Wait会議の第3回は'Rough Consensus
and Running Archives'をテーマにBFIサウスバンクで2018年10月25-26
日に開催された。詳しくは<https://mediaarea.net/NoTimeToWait3>参照。

3 "The Cost of Inaction Calculator" <https://coi.wearvp.com>とは、保
存に向けた初動の遅れによってコレクション中の何本のビデオテー
プが失われるかをデモンストレーションするツールのこと。AV Preserve社
[米国]が開発した。



国立映画アーカイブに持ち込まれたフィルム。上: アセテートとナイトレートが混在して固着したフィルム。左下: 袋ごと融解して固まったアセテートフィルム。右下: 缶の錆と硝酸セルロースの化学変化で粉化が進んだナイトレートフィルム